

# E. M. Forster の “The Other Boat” について

扇 令 子

## 1

個人と個人との人間関係、これは E. M. Forster が処女作以来、一貫して追い求めてきたテーマであった。とくに男性対男性の同性愛関係が最終的には彼のもっとも関心を寄せる人間関係であったことが、遺作の長編小説 *Maurice* (1913年)、短篇小説集 *The Life to Come* (1971年) から明白になった。彼が同性愛者であったことは生前すでに暗黙のうちには知られていたが、*A Passage to India* を 1924 年に世に出してのち、1 篇たりとも小説を発表することなく 1971 年に 91 歳の生涯を閉じたのも、理由の大半は彼自身述べているように「同性愛者なので、結婚や男と女の関係について書くことに飽きてしまった」<sup>[1]</sup> ためであった。イギリスでは 1957 年に提出された「ウォルフenden 報告」の勧告趣旨が、不完全ながら 1967 年正式に立法化されるまで、同性愛は犯罪とみなされていた。現在でもなお、それが異常なもの、反社会的なものとしてタブー視されていることを考えれば、Forster が同性愛を扱った作品をごく一部の親しい友人達に見せてはいたものの、公けにする意図はなかったとしても不思議ではない。又、周囲の親しい人々——友人、母をはじめ親類縁者との人間関係をかけがえのないものとみなしていた Forster であってみれば、作品の刊行がそれらの人々に及ぼす影響を憂慮したことも頷ける。

本稿では上述の短篇小説集 *The Life to Come* 所収の Forster 最後の作品 “The Other Boat” (「もう一方の船」1958 年) をとり上げ、そこに展開される人間関係はどのようなものか、なぜそのような人間関係を描いたのか、作者の意図を探ってみたい。

はじめに作品の成立過程に少々触れておく。5 章から成るこの短篇の冒頭の章は、1913 年頃すでに出来上っていたが、偶然 Forster の友人の目に触れることとなり、1948 年 12 月 *Listener* 誌に、“An Introduction to the Unwritten Novel” として掲載された。それから数年、構想もまとまり執筆にとりかかったのが 1956 年末、完成は 1958 年頃という。すでに 78、9 歳に達していた Forster であったが、「以前にもまして書くことが自分を魅了するものとなっている。」<sup>[2]</sup> と、友人に語った言葉からも、大いに創作意欲に駆られ、書くことを楽しんでいた姿が伺われる。

a long short story<sup>(3)</sup> の形に収まったこの作品は、文学作品としての完成度から観ても、さきの短篇集中、一、二を争うものといえる。内容、技巧とも Forster の面目躍如といったところで、彼の長い生涯に渡る作家活動の最後の光芒を示すものといえよう。

## 2

この作品の構成は、第一章が Lionel March と Cocoanut の子供時代——インドからイギリスへ向う船で遊び友達であった二人と、長男がインド人との混血児とおもわれる、奇怪な格好をした頭（彼のあだ名はここから来たものと思われる）の子供と親しくするのを何ともはや不快に思う Mrs. March。彼女の Cocoanut への嫌悪感が、憎しみとなって表面化するきっかけとなるエピソード——が描かれている。

第2章以降は、プロットが幾分混み入っており時間が交錯するが、第1章から約10年経過し、時は1910年代、場所は第1章と逆に、イギリスからインドへ向け紅海を走航中の汽船の上。Lionel はアフリカでの戦闘で武勲をあげ昇進し、今や陸軍大尉、婚約者 Isabel の待つインドへ赴任するところである。満員であったにもかかわらず、困っていた Lionel に切符を手配してくれたのは、あの Cocoanut で、しかも二人は船室まで共にすることになる。Cocoanut の策略が功を奏し、Lionel は Cocoanut と同性愛関係に陥ってしまう。しかし、二人の関係が明るみに出れば我身の破滅は必至と悟った Lionel は、かと言って Cocoanut への愛も断ち切れず、ついに Cocoanut を絞殺し、自分は裸かのまゝ甲板から海へ身を投げ自殺する。

この作品での人間関係は、Lionel March と Cocoanut に焦点が置かれていることは言うまでもないが、彼らに深くかわり合うのが Lionel の母、Mrs. March である。

第1章のエピソードは、その意味で重要になってくる。

Mrs. March は、スエズ辺りを航行中の船の遠く離れた甲板で、灼熱の太陽の下で、陽除帽も被らず、Lionel をはじめ彼女の幼い子供達が Cocoanut に率いられて奇妙なゲームに興じているのを目にして、日射病に罹るのではと気を揉み、遊びを止めさせようとする。が、そこは船客が立ち入らない場所であったため、気まずい思いをする羽目に追いこまれ、疲労と心痛（実は陸軍大佐であった夫が、ビルマの原住民の女——ひょっとすると男かもしれないのだが——にとられ、失意の彼女は5人の子供を引き連れ帰国の途上であった。）から、ヒステリー状態に陥り、それまで抑えていた Cocoanut に対する嫌悪感が一度に募り、激しい憎しみの言葉となって彼の上に浴びせかけられる。

‘You never will play any game properly and you stop the others. You’re a silly idle useless unmanly little boy.’<sup>(4)</sup>

この一件——Mrs. March と Cocoanut の対立——は、後々まで尾を引くことになる。

というのも、帰国後2週間で、Lionel の末弟——Baby と呼ばれていた——がインフルエンザに罹って死んだ時、Mrs. March はそれを Cocoanut のせいにして、日射病が原因で死んだのだと固なに信じ、周りの者を困惑させたのである。もとはと言えば、彼女が船上で知り合い後に「家族の主要な相談相手」となった Armstrong 大佐との交際に気をとられ、子供達の世話が十分でなかったという後めたさが、自分でもそれとは気づかず、非難の矛先を Cocoanut へ向け、Cocoanut への憎しみに転化されてしまったのである。

Cocoanut の方は、Mrs. March の自分に対する憎しみを決して忘れることはなかった。それゆえなおさら、Lionel を母から引き離し確実に自分のものにするべく、着々と、用意周到に事を進めていく。

Lionel は、Cocoanut のように微妙に屈折した Mrs. March の母として女としての苦悩を見抜くまでには到らず、父親の不名誉きわまる事件によって傷ついた家名を背負い、母親へは同情と崇拜の入り混った、別の見方からすれば、母から精神的に自立しきらない青年として成長する。

Lionel, Cocoanut そして Mrs. March のいわば三角関係は、母と息子、男性対男性、男性対女性といった、対立し、又は融合する人間関係の諸相を発展、展開させていく。中心人物 Lionel と、彼と男性対男性の、人格と人格を認めあった、身心共に合一した友愛関係——これこそ、Forster が理想とした同性愛的人間関係であった——を結ぼうとする Cocoanut の間に介入し、常に彼等の背後にいて彼らを脅やかすのが、Mrs. March の存在である。彼女はどのような女性であろうか。

Forster の作品ではあるタイプの女性——年令あるいは既婚、未婚を問わず——は、男性間の真実な人間関係を妨む役割を与えられて登場する。因襲的で階級意識が強く、自尊心が強く禁欲的で、男性支配型の女性である。処女作の *Where Angels Fear to Tread* の Mrs. Herriton とその娘 Harriet, 短篇小説 “Albergo Empedocle” の Mildred, とくに *The Life to Come* 所収の同性愛のテーマが前面に強く押し出された “Torque” の Perpetua にその特徴が色濃く出ているが、Mrs. March もこの系列に属しているとみてよい。

ただ彼女の場合、描かれ方が、固定化され、いさゝか人格的魅力に乏しいという恨みがある。短篇作品という、小規模の創造空間の中での characterization は、大きく制約されることは百も承知の上でなお僅かながら不満が残る。Forster もこの点は気にしていたようである<sup>[5]</sup>。Mrs. March は Forster の主題を展開する上での道具的役割を荷った人物といった印象が強く、観念的である。ある批評家は、「牧師の娘」で「軍人の妻」である彼女を、

Mrs. March has become a figure of archetypal terror and the embodiment of an attitude to life that (figuratively) slays young men by thousands.<sup>(6)</sup>

と解釈しているのであるが、ともかく、イギリスの社会規範を築き上げてきた中産階級、厳密に言えばここでは上層中産階級の典型的母親、あるいは端的に “an asexual Victorian matriarch”<sup>(7)</sup> と言うこともできよう。

Lionel が Cocoanut と兵隊ごっこをして遊んだ時、‘....., but it doesn’t matter on a voyage home. I would never allow it going to India.’<sup>(8)</sup> と、連れの Armstrong 大佐に言い訳がましく言う場面がある。植民地インドへ赴く身ならば、支配する側の民族としての威信にかけて、有色人種の血の混った子供など、自分の子供に近付けはしなうと言わんばかりの、彼女の民族的な偏見と、対面と名誉を重んずる階級意識が端的に現われた格好の例といえる。

### 3

Mrs. March の影響下で成長した Lionel の 10 年後の姿はどのようなものであろうか。2 章の導入部で、作者は Lionel を次のように読者に紹介する。‘He was what any rising young officer ought to be—clean-cut, athletic, good-looking, without being conspicuous.’<sup>(9)</sup>

ここには上層中産階級にふさわしい青年の典型が示されている。当然ながら、彼と同じ階級に属するブリッジゲームの仲間——Arbuthnot 陸軍大佐夫妻、Lady Manning を筆頭とする the Big Eight (「八大人」) のお歴所にとっても、Lionel は彼らにふさわしいベツ的存在である。

しかし、皮肉なことに彼はブリッジでは身分不相応に負けがこんでおり、しかも船室に戻ればすでに同性愛関係になっている Cocoanut が、Lionel の帰りを今や遅しと待ち構えている。

この章の冒頭で、Lionel が母宛てに書いた乗船のいきさつをすでに読んでいる読者は、文面と実際の状況がまったく食い違っているのを知り驚くことになる。手紙では Cocoanut を ‘dago’ (「黒ん坊」) と呼び、人種的偏見、下層階級に対する蔑視が歴然と示されていただけに、その当人の Cocoanut と Lionel がベッドを共にする間柄だという事実は、読者にショックを与える。

それと同時に、Lionel の二つに内部分裂した姿が、浮き彫りにされる。上層中産階級に属している人間としての、名誉と体面がそのまゝ個人の価値につながる自己の外面的世界と、もう一方は、Cocoanut との愛という個人的な人間関係が展開する、自己の内面的世界である。Lionel の内面と外面の分裂は、葛藤は、まだ本人もそれがどれ程深刻な事態をもたらすか、はっきりと自覚できないでいるため、いっそう彼の行末に、不安な予感を感じざるをえない。

一方、この章の結末部分で作者は初めて Cocoanut に視点を置き、彼が「どの人種にも属さず」「欲しい物は何でも手に入れる」若者だと述べた後、次のように Cocoanut の真意を明かす。

“All his life he had wanted a toy that would not break, and now he was planning

how to play with Lionel for ever.”<sup>(10)</sup> 更に続けて Cocoanut が Lionel との再会をどのようにして可能にしたかが述べられる。

He had longed for him ever since their first meeting, embraced him in dreams when only that was possible, met him again as the omens foretold, and marked him down, spent money to catch him and lime him, and here he lay, caught, and did not know it.<sup>(11)</sup>

Lionel は生まれと、社会的地位では、Cocoanut など及びもつかない程優位に立ちながら、個人的な Cocoanut との関係では、立場が逆転していることは明白である。

Lionel が Cocoanut と同性愛に陥るようになった理由は、‘He had always liked the kid, even on that other boat, and now he liked him more than ever.’<sup>(12)</sup> とあるように子供の時から Cocoanut にひかれていたからであり、Cocoanut の方も初めて Lionel に会った時以来、彼にひかれていたのである。二人の結びつきは運命的である。とはいえ、二人がすんなりとこの関係に入ったわけでは決してなかった。というのも二人の間には容易に越え難い障壁があった。その最たるものはもちろん二人の性に対する考え方の違いである。Tilbury で出航の間際に、Cocoanut が不意に Lionel に対して求愛行為に及んだ時、Lionel はぞっとして、それから胸のむかつくような不快感に襲われ、Cocoanut を罵倒し憤激して脱兎の如く部屋を飛び、その筋に訴え出ようとまで考えた。それゆえ、Cocoanut が、「恥辱」を感じて当然な行為をしながらいっこう気にしている様子がないことは、Lionel にとってはまったく理解し難いことであった。彼は Cocoanut が「後悔」するか、自分のやったことに対し「恐怖」を感じるかいずれかであろうと予想していたからである。清教徒的な禁欲主義に凝り固まっている母の影響下で、又、学校で、規範や道徳を教え込まれた Lionel にしてみれば、当然予想される反応であった。しかし、Cocoanut は罪意識などまったく感じていない。彼は、迷信、呪術が生活と一体化した、異教的世界に属する人間である。ゆえに彼の宗教、文化、習慣、規範、価値観など、Lionel の属する階級のそれとはまったく異っているのである。

性は ‘brutality’ (「獣性」) を属性として持つゆえに、抑圧し、罪深いものとすべきであり、恥すべきものであると、Lionel は、納得してきたのである。同性愛に至っては、これは「口にすることも憚られる」忌わしい、道に外れた言語道断な行為である。彼はごく普通の正常な（傍点は筆者による）青年で、仲間との付き合いで淫売宿に行ったこともあるが、今は婚約者 Isabel のため身を慎しみ、未来の夫としての義務を果たそうとするのである。

Cocoanut は前に述べたことから明らかなように、ずっと昔から身心共に Lionel にひかれていた。彼は Lionel の青い目、房々した金髪、血色のいい顔、白い歯、がっしりとした広い肩、

弾力のある縮れ毛が生えているごつい手をした ‘Nordic warrior’ (「北方の戦士」) たる その姿、彼の肉体にひかれており、又、当の Lionel に、彼の肉体が性的に魅力があると気づかせたのも Cocoanut であった。今まで恥ずべきものと考えていた性を罪悪感から解放し、性は愉しむものであると Lionel は初めて知る。そして一旦、習慣を破ったら徹底的にそれを破ってしまう、激情型の彼は、Cocoanut との肉体的結合にひたすら没入してゆく。

Lionel を、Cocoanut が計画通りに自分のものにできたのは、彼が、人間の心理に深い洞察力があり、人間の弱点を見抜く力があつたためである。彼は Lionel が、個人的には、階級意識を持たず、昔のように友情を抱いていることがわかっていたので、はじめは失敗したが、その後は慎重に、巧妙に手段を講じ、ついに Lionel の弱点——シャンペンに目がない——を突き、彼を酔わせ誘惑し成功するのである。前に Cocoanut が、Lionel との同性愛関係で優位に立っていると述べたが、彼はいわば、獲物を狙える猟師のごとく、Lionel を罠に追い込んでいく。

そしてこの追う者と追われる者の心理と行動の描写が、生き生きとして躍動感がある点に、この作品の真価があると言っても過言ではないだろう。ここでは、従来の Forster の作品には見られなかった男性と男性の関係が、その肉体交渉の場面が、大胆に、簡潔に描かれる。会話は、従来の小説でも非常に効果的に、往々にしてアイロニーを狙って挿入されていたが、ここでは性行為に直接関連する Lionel と Cocoanut の会話は、読者に不快感を催すことがなく、むしろ非常にリアルで、二人の子供の頃からひかれ合っていた心情が、観念的な印象にとどまらず身心の結合の記述により、自然で納得のいくものとなっている。

又、Lionel の「獣性」「残虐性」、これは男性の内奥に潜む暗黒の力、破壊的要素を孕む人間の根源的な生命力の激しい迸りとみることができ、従来の Forster の作品ではしばしば突発的、激情的に肉体的苦痛をとまなう暴力行為が描かれ、そこに上述した要素が感じ取られつつも、曖昧な不可解な部分があった。が、この作品では、Lionel の獣性は明確に打ち出される。彼の男性としての活力、逞しい戦士としての雄々しさゆえ、Lionel は Cocoanut の憧憬の的であるが、同時に、その残忍さで、彼を破壊しかねない狂暴な獣でもあるのである。しなやかな肢体と敏捷な身の動き、そしていつも快活で機知に富み老獪ですらある Cocoanut は、Lionel のこの資質が、彼を「幸せ」にするものでもあり同時に、用心して十分にその本質を見極めねばならぬものであることを十分に承知しているように思われる。獣性が、二人の、心身両面でのサディズム、マゾヒズムの関係に均衡を保たせ得ない程、その力を極限まで拡充した時、二人は互いを、その絶頂の極みで滅ぼすことになるのである。

#### 4

ここで、もう一度、Lionel の Cocoanut との個人的関係の発端からその結末に至るまでの経

過を見て、彼の外面世界と内面世界の対立と葛藤を追ってみよう。

というのも Lionel と同じ上層中産階級に生まれ育った Forster が、Lionel にどのような生き方をさせるかを我々読者が知ることは、まさに、Forster の上層中産階級に対する考え方、彼自身の生き方、物の見方を知ることにつながるからである。

Lionel は、母への手紙の結びに、Lionel March と署名した。全体的人格としての Lionel がここで紹介され、その後、ブリッジ・ゲームに戻る彼は、‘Captain March’。軍人という職業で地位、名誉に恵まれた外面的世界で評価される姿である。船室に戻ると、‘British officer’、Cocoanut に ‘Lion of the Night’ と呼ばれる時には、彼の恋人、私的な立場の人間である。そして ‘Nordic warrior’ として、現実には軍人であり、Cocoanut にとっては力強い英雄である。3章で、ブリッジの借金を Cocoanut の秘書を通じて支払ってもらった Lionel は ‘sponger’、つまり居候的存在であり、Cocoanut から身の廻り品を次々と贈られ、Cocoanut の寵愛を一身に受ける美丈夫の Lionel は、ゼウスの愛を受けたガニュメデスのごとくであり ‘Half Ganymede, half Goth’ で、贅沢三昧に耽る ‘Viking at a Byzantine Court’ と形容される。ところが、ついに二人が、Cocoanut が待ちに待った、身心共に完全に和合する時がまさに始まるという時に、船室の鍵がかけ忘れてあったこと、それも Cocoanut が知っていたのに、Lionel に告げなかったことから二人の間に諍いが起ってしまう。たちまち Lionel は ‘a general...at a battlefield nearly lost by his folly.’ に立ち戻り、Cocoanut のことが暴露して軍隊から罷免されるのではと恐れおののく。二人の愛の前には、ドアの鍵がかかっていると、かかっているといとそんな事は大きなことではないと考える Cocoanut から Lionel は、軍隊から追い出されたら自分の下で働けばよいと告げられ、「独立し、人に命令を下す」ことが「誇りでもあり義務でもある」自分が ‘male prostitute’ にまで成り下ったことを思い知らされるのである。Lionel の姿の変化は、Cocoanut との個人的関係の移り変わりを示すばかりでなく、彼の外面的世界、つまり上層中産階級に属する軍人としての自己が、彼の内面生活によって徐々に侵害され、分裂してゆき破綻をきたしてゆく姿、別な見方からすれば理性、知性が後退し ‘passion’（「情熱」）が優勢となってくる過程が描かれてきたともいえる。さて最終的には「正気」に立ち戻った Lionel は、自分が外面的世界から逃れられない、自分の階級から離れたならもはや破滅するしかなく、社会から葬り去られると悟り、Cocoanut との関係を清算しようと決心する。彼のイギリス人としての、上層中産階級としての民族的価値観は、彼の階級と地位を選ばせ、情熱にもとずいた愛による個人と個人の人間関係は、危険で恐怖をひきおこすものゆえ、それを破棄しようとするのである。

ところで、Cocoanut は Lionel と異り、帰属する階級もなく、二枚のパスポートを携帯し、船舶運輸業界では幅がきく、どことなくいかがわしいところがあり、身元のはっきりしない、いってみれば社会のアウトサイダーである。彼が、終始 Cocoanut と呼ばれてきたのも、物語の

結末近くになって初めて、Moraes と姓が紹介されるのも意味深い。

さて、Lionel の決心を決定的にしたのは、今までに何回となく Lionel の心に浮かんできた母親のイメージであった。

But behind Isabel, behind the Army, was another power, whom he could not consider calmly: his mother blind-eyed in the middle of the enormous web she spun—filaments drifting everywhere, strands catching.<sup>(13)</sup>

恐ろしいイメージが、Lionel に、読者に迫ってくる。蜘蛛の巣に Lionel を、がんじがらめに絡めとって、精神的、肉体的に身動きできなくし——清教徒の純潔さを要求し、‘sin’ に陥ることを許さない——それゆえ、自らも夫に去られ苦悩し、真実を見ることのできない、しかし自分の生き方、考え方を固持し、すべてを支配する強い力、容赦ない力として。

「八大人」達が暑さを凌いで休んでいる甲板に戻った Lionel ではあったが、Captain Arbuthnot の Cocoanut に対する人種差別のことばに激しい反感の気持を抑え切れない。Lionel の自己矛盾はますます深刻になり、Cocoanut への愛情をたち切れないまゝ船室に戻るが、Cocoanut が ‘kiss me’ と誘惑してきたのを拒絶し、その仕返しに Cocoanut が Lionel の腕に喰みつき、Lionel は苦痛と、激情にかられて Cocoanut に復讐し、エクスタシーの極みに、知らぬ間に、Cocoanut を絞殺してしまう。ここで注目すべきは、Lionel が事の成りゆきを後悔していないことである。この事を告げるまでに、作者は、いくつかの伏線を置いてきた。Lionel が、Cocoanut の罠に入ってゆきながら、自分でそれを察知しつつも頓着しない傾向が、次第に強くなっていた点、二人が互いに運命的に結びつけられていると直感的に悟っていたことなどである。それだけに、二人の結末は、なるべくして起ったわけで、「真の人間関係」は達成できなかったという絶望感の淵に読者を陥れることは事実である。二人は死によってしか、合一可能ではなかったのである。

## 5

しかし、作者 Forster はこの ‘tragedy’<sup>(14)</sup> を次のように解説している。

...It is a movement from sex to disaster, and a fascinating novel might have been evolved if I had the skill and the restraint to make the disaster gradual or partial: Lionel out of the army decaying & petulant would have been excellent—and the more he deteriorated & fought the tighter would have been the dreary grip. But I wanted a catastrophe of the more romantic type where both crash at the height of their powers.<sup>(15)</sup> (下線部は筆者による。)

そして又、Forster の伝記を書いた Furbank は、Forster の意図を読者に示している。



(He) Said he thought the tragic theme of 'The Other Boat'—two people made to destroy each other—was more interesting than the theme of salvation, the rescuer from 'otherwhere', the generic Alec. That was a fake. People could help one another, yes; but they were not decisive for each other like that.<sup>(16)</sup>

Forster は、Lionel と Cocoanut を *Maurice* の Maurice と Alec のように、俗世間から離れた 'greenwood' にひっそり住まわせることはしなかった。彼は "*The Other Boat*" では、同性愛を弁護することを究極の目的としたわけではなかった。同性愛者をたとえ社会の片隅でも、彼らの幸福を追求させるため、生かし生活させるのが彼の主旨ではなかったのである。むしろ、'passion' という、ある意味で最も純粋で人間らしい情動に、全身全霊を委ね、'affection' (「愛情」) によって個人と個人として燃焼しつくした若者の姿を描こうとしたといえるであろう。Lionel と Cocoanut の愛が階級、習慣、人種の違いを乗り越え、死をもって成就——結末は悲劇であるが——したとみることもできる。しかし、Forster 自身告白しているように、人は、本来、助け合い幸福を得、救済されうるはずなのである。これが Forster の真の願いであろう。同性愛を異常で反社会的なものとする社会規範——Lionel の母に象徴される——に Lionel 同様、自らも縛られていると認めざるをえない Forster の、苦悩と葛藤の果て、なおも理想とする真実の人間関係を追い求めて止まぬ姿勢が、そこに伺われるのである。

#### Notes

- (1) *E. M. Forster: A Life*. vol. 2, by P. N. Furbank, (Martin Secker & Warburg Ltd. 1978), p. 132.
- (2) *Ibid.*, p. 302.
- (3) *Ibid.*, p. 302.
- (4) "The Other Boat" in *The Life to Come and Other Stories*, by E. M. Forster, (Edward Arnold Ltd., 1972), p. 170.
- (5) *E. M. Forster: A Life*, vol. 2, by P. N. Furbank, p. 302.
- (6) *A Reading of E. M. Forster*, by Glen Cavaliero, (The Macmillan Press Ltd., 1979), p. 145.
- (7) *E. M. Forster, revised edition*, by Frederick P. W. McDowell, (Twayne Publishers, 1982), p. 100.
- (8) "The Other Boat", p. 167.
- (9) *Ibid.*, p. 171.
- (10) *Ibid.*, p. 174.
- (11) *Ibid.*, p. 174.
- (12) *Ibid.*, p. 173.
- (13) *Ibid.*, p. 193.
- (14) *E. M. Forster: A Life*, vol. 2, by P. N. Furbank p. 302.
- (15) *E. M. Forster's Letters to Donald Windham*, (The Provost and Scholars of King's College Cambridge, 1975), p. 41.
- (16) *E. M. Forster: A Life*, vol. 2, by P. N. Furbank, P. 303.

\* 本稿は20世紀英文学研究会第13回例会(1982年11月26日 於大妻女子大学)における発表にもとづく。